建築家の檻

連載11

Grasshouse

1 章 http://p.booklog.jp/book/97575/read

――雪がちらついていた。
　吐く息がトナカイのそれのように白く舞い上がり、全身が凍えるように寒かった。僕たちは北の棟から西の棟に移動しなければならなかった。
　曇天の下、折れた骨のような枯れ木の生えた雪の道を、囚人のような重たい足取りで歩いて行った。雪は足下で、ブキブキときしんだ。
　しばらくすると、早朝の仄暗い風景の中に、高い煙突が二本突き出た巨大な要塞のようなコンクリート建造物が見えた。暗澹とした空気が、列の者全員に伝わってきた。ここまで来たら、生きることの一切の希望を捨てなければならない。すべてはもう、お終いなのだ。
　顔の見えない影のような看守人に、棒のようなもので小突かれ、前のめりになって歩いて行った。四人ほど前の老人が倒れ込んだ。後ろの者は、除けて通った。老人は死に際の蛙のように、片脚だけをぴくぴくと動かしていた。誰も無言で振り向かない。
　黒く錆びた引き込み線のレールを越えて、病棟に入っていく。すでにきつい医薬品のようなものが匂っていた。やがて僕たちは、大きな室内に誘導された。
　そこには、鋭いメスや鉗子を持ち、白衣を着て長靴を履いた恐ろしい医師たちが待っていた。そして、わけのわからない言葉で命令された。裸になれといっているらしい。女が一人、銃剣を持った監視に殴られて倒れ込み、髪の毛を乱して泣きべそになりながら、服を脱いでいった。女も男も、それに倣った。もう、ここでは抵抗しても無駄なのだ。この施設は過酷な地獄みたいな世界であり、発言する権利も力も剥奪されてしまった。
　白衣の医師たちの一人に、愛新覚羅溥儀によく似た丸い黒メガネをかけた人物がいた。満州国皇帝によく似た男は、口元に冷ややかで皮肉な笑いを浮かべ、射器の内容物の量を、慎重に確認していた。
　注射針から、液が飛んだ。
「あれは……ハルピンの悪党の張周明ではないか。どうしてこんなところで、軍医の恰好なんかしているんだ」
　その脇には異様に醜い小鬼のような顔をした看護婦が、幾人も同じような顔をしたロボットのように立っていた。皆、白い看護帽を被り、背が低くて脚が内側に湾曲している。このいびつな体型の看護婦たちは、仏像の中の何とか童子とかいう恐ろしげな顔をした子供ふうの神に似て

いた。
　照明の接触が悪いのか、天井の端でバチバチと明かりが点滅している。荒涼とした壁が張り巡らされた部屋の奥では、裸の初老の男と、裸の若い女が水槽の中に立たされて、頭と心臓部分に電極をつけられ、何かを測定されていた。男の性器も、女の乳房も、彼ら二人の陰毛も、動くたびに水中でゆらゆらしていた。その様子は生きたままホルマリン漬けにされている動物のようにも見えた。
　ときどき女は、水の中で何か叫んで、白眼をむいて、ばしゃばしゃと両手を痙攣させた。明るい照明の下で、目を見開いている仰向けの顔が生々しく見えた。痩せた初老の男は、水に浸かって俯いたまま、蝋人形のように動かない。
　その水槽の下にも、いびつな肉のロボットのような看護婦たちが囲んで、湾曲したがに股で歩き回り、何か作業を行っていた。
　列の者が、張周明に似た軍医に何かきつい言葉で怒鳴られた。僕は列を乱さないように壁の端に移動した。最前列の男は椅子に座らせられて、一人ずつ、注射をされていく。
　僕の順番は、あと四人ばかりになっていた。心臓の鼓動だけが大きく、さらに大きく、痛いように響いていた……。

　――高い天井と淡い流麗な木目が眼に入った。
　ふかふかの真新しい布団の匂いと、明るい障子から射し込んでくる朧げな光線がそれに続いた。僕はシーツの端を指でつよくつかみ、その確実な触りぐあいから、いま見た光景が、夢であることを確かめた。大きな安堵感の中でも、心臓がなおも激しく鼓動している。びっしょりと寝汗をかいている。
（ここはどこだ。他人の家か。いや、丹下ビルの本社のはずだ。……それにしても、いま見た夢は、何だったんだ）
　頭はまだ濁っていたけれども、悪夢から覚めたとき特有の暗いトンネルから解放されたような晴れやかな静寂を感じた。
　遠くの方で、筧の水の音が、涼やかに響いているのに気がついた。
　しばらくすると、鹿威しの甲高い音が、コーンと鳴り響いた。僕はその抜けるような竹筒の音に、救われたような気がした。
　室内を見渡し、ここに到るまでの経過を思い出そうと努めた。そもそも、時間の感覚が曖昧で、どれくらい過ぎたのかが分からない。
　奇妙な夢を見たのは、どうやら、丹下会長と関係が疑われる旧七三一部隊の写真が、頭の中に刷り込まれてしまったためらしい。資料調べの途中で何となく意識下に滑り込んでしまったようだ。
　しかも馬鹿げたことに、あの水槽の人体実験めいた光景は、ヨーゼフ・メンゲレによるナチスの収容所か何か、まったく別の写真だったと思う。メンゲレ博士は有名な「死の天使」の異名を持つナチスの医者だ。戦後は南米に渡ったとも、敵国であったはずのアメリカで秘密のマインドコントロール実験などを繰り返したともいわれている。この悪夢の材料は、もっと別の下らない

娯楽映画の記憶だったかも知れない。しかも、おかしなことに、日本人である僕自身が、実験動物の「マルタ」にされていた。また、メンゲレの代わりに、あのニヒリスティックな二重スパイの張周明のイメージにすり替わっている。どうやら、僕の潜在意識が恐怖にかられて、勝手におかしな混合物を夢に仕立てていたらしい。

自分の夢がかつて見た映画や、本や、ネット情報の合成に過ぎないことに気がついて、半ば感心しながらも、おかしくなってきた。というよりも、そのように分析して笑い飛ばすことで、先程まで囚われていた重苦しい恐怖を、拭い去ろうと努めた。

辛島さんは関東軍や石井七三一部隊に対して強い憤りを表明していたが、そもそもが、そんな戦争犯罪があったかどうかという疑惑自体、まだ百パーセント完全には証明されているともいえないようだ。厖大なアメリカの国立公文書館のファイルにはその証拠が確認できなかったともいう。これは、色川さんに教えられた話だ。色川さんによると、辛島さんは左翼系の人間だから愛国心がないのだという。もっと日本の国の歴史を誇りを持ってみるべきだと。そのくせ色川さん自身、しょっちゅう中華屋や、コンビニの中国人の女の子を追いかけては、振られているのだ。

そんなことはともかく、僕は会長のインタビュー関連で、その後何度か辛島さんと会って質問をしていた。これは色川さん抜きで、である。

その際に、アメリカの国立公文書館に七三一関連の記録がなかったとかいう、色川さんから聞きかじった話をしてみた。

「そんなもの、最初から入れてないのさ。細菌兵器というのはアメリカが現に使っているものなんだからね。これは軍事上の最重要機密だろう。マッカーサーは厚木に降り立った日に、ジェネラル・イシイはどこにいると質問したそうだ。天皇と石井四郎の処遇問題は、連合軍総司令官、自ら解決しなければならない大問題だったんだ。つまり米軍は、日本の軍医たちが満州で何をやっていたかを、正確に把握していた。それに、細菌戦の実験データは、軍人としては一番の関心事のひとつだったわけさ」

パイプの端を歯で噛みながら、辛島さんは灰色の髪を撫でた。

「じゃあ、最初から公文書館には、資料として入れてなかったという……」

「うむ。もちろん、軍の極秘文書の保管室の方にあるだろうね。こういうことは大抵、司法の権限も越えているのさ。アメリカは、人体実験の書類を残さないことで、七三一幹部との裏取引がなかったことにしているわけさ。これは最初にこの問題の口火を切った米国のジョン・パウエルの告発本をはじめ、日本でも学者やジャーナリストの本が何冊もある。羽木君、キミは石井がどうしてあんなに裏工作をしたと思う。ＧＨＱの戦犯追及が激しくなってくると、千葉の郷里で、医者と村長を巻き込んで、葬式まで偽装して出してみせたんだぜ。九十九里浜にも近い、加茂という小さな村だ。石井家は代々そこの大地主だった。この偽装された葬式は、自分がやったことの重大な意味をよく理解していたからじゃないのかな」

そう辛島さんにいわれると、不勉強な僕は、まったくわからなくなってしまう。

「朝鮮戦争が一九五〇年から始まるよね。そのとき、あの石井部隊で研究されていたペスト菌によく似たものが、使われたという説もあるんだ。つまり、研究データはそっくりそのまま、アメ

リカに極秘のうちに運ばれて、フォートデトリック研究所あたりで、発展させられていった……」
　この特殊部隊の人体実験の証拠写真を載せている有名な推理作家のベストセラー本には、別の写真が混じっているという。
　こういった資料の不備は重大なミスだろうし、南京大虐殺のプロパガンダの多くに、日本軍の残虐行為として、蒋介石の国民党軍の所業が証拠写真として掲載されていることも事実だ。しかし石井部隊の問題は、資料の一部が間違っていたとしても、無視することのできない史的事実のさらなる検証が必要だということだろう。
　つまり、防疫研究の権威であった石井中将という軍医が、彼の命令下で現地の民間人に対して、人体実験(被験者たちをマルタといった)が行ったかどうかである。この事実の検証については、議論はいまだ二つの陣営に分かれているのだ。
　辛島さんはパイプをふかしながら、こうも付け加えた。
「さあ、キミもよく考えて。いったい日本の戦後空間というのは、誰が設計して、誰が図面を引いて、誰が施工したのか。その柱は、梁は、レイアウトは？　壁や屋根裏や地下部分は、どのような構造になっているのか。よく、考えてみたまえ。僕はさ、そこに、日本人の哀しみのようなものを、感じるんだよ……」

　日本の戦前の権力構造に批判的な辛島さんのような人間は、石井細菌部隊の戦争犯罪は、存在したという。反対に、色川さんのように日本の国の誇りを取り戻すべきだという人間は、人体実験などは中国その他のでっちあげで、あれは大規模な防疫施設と医学研究所に過ぎず、この問題をあげつらっているのは、国内の工作員や反日勢力なのだという。
　もっとも、にわか民族派、ナンチャッテ右翼の色川さんの場合は、辛島さんほど思想的に深いわけではない。半ば、辛島さんに影響されたくないがために、反論しているようなところもある。
「そもそも日本は、アメリカとイギリスに戦争せざるを得ないような状況に追い込まれたんだ。そこんとこ、チミはわかっておるのかね。ん？　何も知らないくせに、偽善的にふるまいたがる羽木みたいな似非ヒューマニストが、いまのように、日本をプライドの持てない自虐的な国家にしてしまっているのだよ」
　確かに僕は歴史にうといが、そういう言い方はないだろうと思う。この手の話題に入り込むと、最後には感情論の対立となって、なかなか歴史的な事実の検証には到らなくなってしまう。
　しかし、むしろ僕としては、辛島(左翼)、色川(右翼・歴史修正派)、羽木(二人の見解の双方を理解し、さらにそれを乗り越える客観的な第三の視野)という構図となって、先輩二人を、いつか見返してやろうと思っている。
　まあ、無理かも知れないが……。
　ただ、色々と調べていくと、僕の住んでいる小田急線の喜多見のさらに向こう、多摩川を越えた登戸に、陸軍の毒ガス研究所があったことは確からしい。この登戸第六研究所や、瀬戸内海の大久野島という孤島(いまは「兎の島」の名で、観光地として有名らしい。残された実験動物の兎

たちが、戦後になって野生化して増えたのだ)で、毒ガス兵器が作られていたのなら、あまり監視のきつくない満州のハルピン近郊において、秘かに細菌兵器も研究され、ことによると人体実験も行われていたに違いない――との推測が出てきても、おかしくはない。そして、そこで実験されたのは、「兎」ではなく、「マルタ」なのだ。マルタは、一本、二本と数えられたという。
　そして、なぜ石井中将がＧＨＱからの戦犯追及を免責されたのか、ほんとうはＡ級戦争犯罪人として、東京裁判にも出廷させられるはずの人物であるにもかかわらず。つまり、そこに研究データとの裏取引があったのではないか、という疑惑が生じることになってくる。
　単なる病院であれば、敗戦直後になって、ハルピン南方の平房にあった巨大な研究病棟も爆破する必要はないはずだ。その際に、丹下会長も、片腕を失うこともないかったはずだ。
　しかし結局のところ、こんなふうにジグザグ思考を繰り返すだけで、謎は以前として、謎のままなのであった。

　上半身を起こし、柔らかい布団の表面を不審げに触りながら、ぼんやりとした気分の中で、記憶を探ってみた。
　幾つかの夢の間を彷徨っていたような感触がある。
（あの二人に、催眠薬でも飲まされたのか）
　聞いてはいけない危険水域に触れ、少し質問が過ぎたのかも知れない。
丹下会長は、大陸での自分の所業を自慢したい心理と、隠さなければならない心理とがあって、その判断があやふやなようであった。僕自身も、実際に依頼されたのは歴史の真実の追究でもなんでもなくて、会長の自慢話をそれらしくまとめればよいだけのことなのだ。あるいは、難しく考えすぎているのかも知れない。きっとこれは、辛島さんの影響だ。
　それはともかく、内緒で酒に薬物を盛られたという疑念がわいて、何だか侮辱されたような気がした。
　それまではどうということもないような他愛ない話ばかりしていた小夜子さんが、ある部分に触れると唐突に割り込んできたのは、最初からお目付け役だったのだろう。おそらくはＴＣＩＡの律子専務あたりに、命じられて。彼女たちは、歴史的な事実が噂通りなのかどうかはともかく、丹下ファミリーとの関わりは触れて欲しくないらしい。
　仄暗い壁に半月形の窓があり、障子の桟を透かして、淡い藤色の条を広い畳に形どっている。藍色の菱形の花器の中には、青紫色の桔梗らしき花が活けられてあった。明るいレモンイエローの光が射し込み、和室の調度品の輪郭を清潔に輝かせていた。
　天井脇には精巧に彫られた欄間が見える。
　僕は布団を剥いで、立ち上がった。なんだか体全体が痺れている。
　会長も和服姿の女性もいない。携帯の充電が切れて時間すらわからない。
　適当に布団を畳んで端の方に重ねてから、僕は辺りの畳の上を歩いた。
　おそるおそる周辺の気配をうかがいながら、廊下に出てみた。石の上にきちんと靴が、揃えてあった。しかし入ってきたときの廊下とは違うようだ。意識を失ってる間に、似たような別の和室に移されたらしい。

ともかく歩いて行けばどこかに出るだろうと思いながら、廊下の奥の突当りの木の扉を押し開けた。
　すると下へ続く狭い木の階段が現れた。赤茶けたような廊下が続いている。僕は全体像のよくわからない木造建築の内部を彷徨っている状態だった。
　階段を降りて行くと、さらにまた廊下が横に始まり、吸い寄せられるように奥へ奥へと進んで行った。 地方の由緒ある温泉旅館、それも増築に次ぐ増築が重ねられ、きっちりとした設計図が見えにくい木造建築といった印象だ。まるで会ったこともない「幽霊建築家」鷲巣数光の詐術にひっかけられ、挑発されているようで、癪にさわる。こうなってくると、この迷路のすべてを探求してみたくもなってきた。
　この辺には、監視カメラはないようだ。いや、どこか目立たない意外な場所に設置されているのかも知れない。
　しばらく狭い廊下を進むと、いきなり天井裏へでも招くような頑丈で急な梯子が現れた。その上は、細い廊下になっているらしい。誰もいないのを確かめると、激しい動悸を感じながら両腕に力を込めて、太い梯子を登った。

　上の廊下に出る。そのまま僕は憑かれたように、十数メートルほど奥へ進んで行った。
　扉が見えた。
　静かに手で押すと、鈍い音を響かせながら木製の扉はあっけなく、くるりと回転した。と、同時に何か妙なものが出てきて床板を傾斜させ、向こう側へと押し出された。そしてそのまま、僕の体は滑るように、斜め下方へと落下してしまった。
　一瞬、ひやりとしたが、軽く腰骨を打っただけで、ゆっくりと湾曲した曲線を滑り落ちていった。あらかじめ扉の向こうがどうなっているのか知っていれば、痛みもなかったはずだ。
　途中で、滑り台の速度が弱まり、緩やかな角度の中で安全に下の床にまで到達できるように配慮されていることが、僕にもわかった。
　この「兎穴」のような仕掛けは、罠にもよく似ていたが、別の意図の感じられる。滑り台の設計者は、造型でユーモアを表現していたようだ。
　幾つも美しく並んだランタン風のアールデコ調の壁の灯りが、イルミネーションのように目の前を幻惑していく。その効果が巧みに計算されている。
「何なんだこれは、一体」
　秘書の芳田慶子嬢が、この建物を忍者屋敷呼ばわりした意味が、ようやくわかってきた。起き上がると、周囲は鏡張りになっている。
　右も左も正面も、長方形の鏡だらけだ。廊下のようになっているが、夥しい鏡のおかげで、どこが出口なのか分からない。まさか、滑り台を逆に登っていかないと、元には戻れない――なんて構造になっているわけでも、ないだろう。
　僕が動くと、手前の鏡の僕も、奥の鏡の僕も、同時に動いた。
　二十人も三十人も僕自身が、同じ姿勢で行列するように立っていた。夥しい映像の重なりと架空の奥行きのため、遠近感が分からない。銀色の冷たい空間の中で、どいつもこいつも馬鹿みた

いな顔つきをし、途方に暮れている。僕は思わず苦笑いした。
　手を挙げると、数十本もの腕が群衆の腕のように挙がった。まるで千手観音だ。手を水平に伸ばしてみると、よく切られたトランプのカードのように、前方にずらりと一列に連なった。これは奇妙に面白かった。
　奥に回転扉になっている鏡面があるらしく、フラッシュのように一定の間隔で、光が交互に射し込んでくる。光はそのまま変化を重ね、壁や天井を多彩な透明光のまじるステンドグラスのように彩りながら変化していった。
「なんだか、万華鏡みたいだ」
　軍艦ビルの内奥部に秘められた透明な光のカレードスコープ。
　何やらこのお伽噺ふうの空間全体に、鷲巣数光という建築家の冗談めいた意志のようなものを感じた。というのも、とうてい施主である丹下喜作会長の要求には収まりきらない異様に斬新な発想や造形感覚が、ここには示されているような気がしたからだ。
　ふと次のような考えが湧いた。
　この不可解な空間は、丹下喜作と鷲巣数光の合作の妄想空間なのだろうか。一人は、自分を神格化したがっている丹下喜作会長、彼自身を崇め奉るバイブルを書けと命じている半狂人。
　そして、もう一人は、その小独裁者の意を受けながら、あるいは意を汲んだふりをしながら、クライアントの意図をずらして、まったく思いのままに別の空間を作り上げている建築家の鷲巣数光。
　――この金属とガラスの甲冑に囲まれたビルの内奥部の得体の知れないゾーンは、その二人の精神の対話の場、いや闘争の場、なのではあるまいか。それぞれ方向性の異なった〈絶対〉を志向する二人の思念が、絡み合いながら格闘しているへんてこりんな空間。
　神になりたいと思っている年老いた愚かなミノタウロスと、その意図をはぐらかし嘲弄する魔的な創造神デミウルゴス。いわば権力者と創造者の一対、そんな比喩が浮かんできた。
　もっともこんな言葉自体が、鷲巣氏の著作である『建築家の檻』に頻出するボキャブラリーではあるのだけれども。
　となると、僕自身は迷宮の探究者テセウスなのか。それは少々、恰好が良すぎる。それに、アリアドネは芳田慶子、椹野花枝なのか。それも違うように思う。あの生意気な秘書嬢は僕のことを馬鹿にしてからかってばかりいるし、椹野さんはクリスチャンだし、あまりにも性格が天然すぎる……。
　何だか鏡の間をふらついているうち、こちらの思考までが怪しくなってきつつあるようだ。他人の仕掛けた想像力、イリュージョンの中で、僕は迷子になってしまったような気もする。さっきの滑り台を降りた瞬間あたりから、どうも、因果関係や論理に結び付いた通常の思考ではなく、夢や象徴や神話にのっとられた変な思考に誘導されている。思考の場、意識の波長そのものが、ゆがめられ、流動化されているような。建物全体の構造の中で、いまどの位置にいるのか、それがよくわからない。まるで自分自身が、斜めに走る階段を昇り降りしているエッシャーの影のような人物にも思えてくる。
　この和洋折衷のラビリンスを、誰かが解読し、味読しながら彷徨うことを、あの孤独な設計者

は望んでいるのだろうか。僕は丹下会長に自伝書きの使用人として使われ、同時に、鷲巣数光の創り上げたイリュージョン空間に彷徨っているのだ。建築家の暗示や謎掛けに挑戦するような気持ちが、ますます僕の中で首をもたげてきた。

　それにしても、疲れてきた。
　僕は溜息をつきながら、鏡の前でしゃがみ込んだ。指で触れると、ひんやりとしていた。床だけは、実物だった。たちまち鏡面のあちこちには、同じ格好で腰を降ろした僕の姿が、夥しく現出した。
　少し立ち上がって動こうとすると、何かの均衡がくずれたように、僕自身の身体が無数に分化し、鏡の中に映し出される。とてもそれは奇妙な感じだった。顔を横に向けると、いっせいに、第二の僕、第三の僕が、横を向く。
　動きをやめる。位置を変える。
　すると僕自身は当たり前の一人の身体の中に、収まってしまう。勿論、これは単なる光と映像の効果に過ぎない。しかし、何か記憶の奥の奥でうずくものがある。遠い遠い記憶の深層部に、僕自身の魂がかつてどこかを遍歴し、それら幾つもの世界と生の中で経験してきたことの象徴的な何かが、ここに暗示されているような気がした。
　……危ない、危ない。またしても、論理的な思考ではなくて、夢や神話や妄念の側に、足元をすくわれそうになっている。無意識のあれこれがせりあがって来て、僕自身の通常の判断を飲み込もうとしている。こんな風に、空間が変わるだけで、自分が変わってしまうものだろうか。それとも、酒の中に混ぜられた薬物が、まだ脳や神経内の血中から抜けていないのだろうか。

　そのとき、水の中で、魚がふっと翻った姿を見せるように、寝ている間に見たらしい夢のひとつを、思い出した。
　薄暗い部屋の中で、一人の男が怒号を発しながら、もう一人の男を棒で追い駆け回している。その男は大きな頭を抱え、泣かんばかりに部屋の中を逃げ回る。彼はそれでも部屋を出ようとはしない。杖を振り上げ追っていくのが丹下喜作のようで、追われているのは長男の聡太郎のように思われた。
　ひたすら追われる男は、大頭を両手で抱えて、棒で打たれながらおろおろと壁伝いに逃げ惑っている。
（妙な夢だな。実際に見た光景のようだ。目覚める直前まで見ていた七三一の病棟の風景とは、感触が違う）
　夢や記憶の分析は、何だかもどかしい。それはおそらく、見た夢を通じて、遠い記憶を引き出そうとしているからではあるまいか。それも、生まれる以前の魂の経験のようなものを。今の僕自身を成り立たせている背景を、くるりと背後を振り向くことによって、引きずり出してみたい。
……うしろの正面、だあれ。
　僕はまた、鏡の間の迷路を歩きながら、さっき経験した「分身」の術と「統一」の術とを、冷

静になって繰り返してみた。
　ひとつの魂と、無数に遍在する魂――その眩暈のような攪乱のような感触を何度も味わうことで、何か途方もない記憶が、意識の水底から浮上してくるようにも予感された。
　ところが、奇妙なことがそこで起った。
　僕自身の無数の鏡像が、一つひとつ微妙に違う表情を浮かべているのである。ありえない。そう思って意識を凝らして見ると、同じ顔に戻っていく。もう一度、意識をぼんやりとさせてみる。緊張がゆるむと同時に、手前の顔と、奥の顔、さらに奥の顔が、目を大きく見開いたり、薄く笑ったり、睨みつけていたり、それぞれ別の表情をしているのであった。しかも放っておくと、髪型や皮膚の色まで変わっていく。表情や顎の線が別の人物のそれに変わっていくのだ。
(あれは、僕じゃないぞ。羽木務じゃない。萩原勤でも、ない)
　しかしそのまま睨みつけていると、それも間違いであることがわかってきた。限りなく親しみを感じる何かが、その映像の中に滲み出てくる。エッセンスとしての僕自身の存在が、光や影の反射ではなく、そこで分化している。しかも似たような別のバージョンとしての魂がそれぞれ宿って、こちらを見ている。これは内奥から引きずり出されて目の前にあふれている過去の記憶だろうか。
　気が狂うような恐怖を感じた。
　――やはり、滑り台のとこからは、夢なのだろうか。
　さっきまで寝かされていた和室の中の布団の感触があまりにも気持ち良かったので、本当はいまだにあの場所に寝たままで、夢を見続けているのではないかとも思った。となると、僕はいま、その夢の空間の内部を歩いていることになる。つまり、この迷宮じみた建築は、僕の意識が、意識そのものをマテリアルとして細部まで創り上げたものなのか。リアリティというのが、自分自身で確認できない。保証できない。ただ、僕は内部でぶつぶつとモノローグじみた思考を繰り返し、しきりに考えている。歩いている感触と、その独語によって、自分自身の正気を支えている。

　いきなり奥の方で、赤ん坊がはしゃぐ声がした。
　誰かいるのだ。僕はぎくりとし、声のする方へ恐るおそる進んでみた。
　酩酊感はまだ抜けていないが、さっきの滑り台の所で打った腰の痛みを感じる。やはりこれは現実であるらしい。体の痛みと他者の気配によって、自我意識が水流の底に巻き込まれていくような不安定な朦朧状態から、ようやく何とか救われた。あるいは、もしあのままでいたなら、鏡の中の狂気じみた存在として、僕の自我意識は、散りぢりばらばらに砕けてしまったかも知れない。なにか江戸川乱歩の物語に、そんな話があったような気もする。
　不意に、鏡の端の下の方に、白い布のようなものが見えた。それがするすると引かれていった。まるで怪奇映画の幽霊のようだ。再び鏡面で囲まれた空間の中に、幼児の笑い声が響いた。
　――晴臣さまァ。どこいらっしゃるのォ。おイタしちゃ、いけませんわよゥ。どこへ行っちゃったの、晴臣さまァ。
　若い女の声が響いた。晴臣とは丹下家の赤ん坊、あの桃色の怪物だ。はちきれんばかりの太っ

た顔と、物凄い握力を持った四代目。
　回転扉からの反射光が、次々に鏡に伝わり、僕の顔をまぶしい金色に照らし出した。
　また床に白い布が現れ、鏡の下の方を這い進んでいった。
（アイツめ、こんなとこで、シーツを被って遊んでいやがる）
　お化けのように頭からすっぽり布を被った赤ん坊は、この鏡の間のどこかで、這い這いをしながら女子社員と隠れんぼをしているらしい。映像が分散されていて、位置が特定できない。歯も生え揃ろわぬ赤ん坊ながら、王子様の戯れ事よろしく、社内大奥の「女官」たちに追いかけさせてご満悦なのである。
　回転扉が、不意に激しく回転した。
　幾つもの扉の鏡が、きらきらと金色の光を放って、あたりをフラッシュのように照らし出した。
　と思うと、いきなり巨大な白い獣が出現し、吠えながら僕に飛びかかった。
　巨体に似合わぬ三角の顔と、人間の太腿のような気味悪い後ろ脚。その両脚の付け根は、肌色がかっている。驚いて思わずしゃがむと、そいつは僕の背中を飛び越え、桃色の湯気の立った舌を出して生臭い息を吐き散らしながら、向こうの扉へと跳ねていった。
「フェルディナンドだ」
　あの嫌らしい白犬。ボルゾイ犬というのは、革命前まではロシア貴族たちに愛好されていたせいか、何とも生意気な品種である。奴に捕まらないうちに何とかこの鏡の間を脱出しよう。僕は次の回転扉を開けた。すると、一段高い渡り廊下のような構造になった目の前の通路を、シーツの脱げかかった桃の塊のような奴が、キャキャキャッとはしゃぎながら、ぎこちなく歩いて行った。
　白い布は何かひっかかり、ずるずると脱げ落ちていった。晴臣のまんまるの肉塊があらわになった。水色のパンツを履いているだけで、裸であった。
　ルネッサンス期の礼拝堂の天井に描かれた太った醜い天使。日本人の目からはどう見ても可愛らしいとはいえない肉団子のような塊、あれに似ている。あるいは、世界史の教科書で見た英国のチャーチル首相の写真にも、よく似ている。
「ああッ、あッ、あッ。あいぎゃア。キャキッ！」
　桃色のいびつな肉塊王子は、猛獣の子のように唸りながら、はしゃいでいる。可愛らしい赤ん坊の声というより、中年男の濁声というのに近い。
　それにしてもこの化け物が、あの二人の子供だとは信じられない。
　あのモデルのように華奢な麻由美が、よくこんなシロモノを生んだものだ。もっとも生みっぱなしみたいだけれども。
　晴臣は僕に気がつかず、フェルディナンドを見つけると、カッと目を見開いて、万歳の格好をしながら、獲物でも見つけたように廊下の奥へと消えていった。
　ここはオーナー一族のプライベート空間なのか。それとも鷲巣数光の秘儀空間なのか。眠っているうちに、僕はうっかり彼らの無意識の層に潜り込んでしまったようにも思われた。ひょっとしたら、あの奇怪な医療実験の夢は、僕自身の恐怖が投影されたものではなくて、丹下喜作のト

ラウマめいた記憶が、僕の潜在意識に勝手に侵犯して、流入して来た現象かも知れない。
　藍色がかったハーフミラーの美しいエントランス・ホールや、吹き抜けのアトリウムの奥にある混沌の中心部。鏡の部屋といい、あちこちにある無数の階段といい、どう見てもこれは無用の空間で、無駄に予算を浪費しているような構造だ。昔の貴族の館ならともかく、社員の福利厚生を考えたまともな企業家のやることではないだろう。
　社員のほとんどは、これらの部屋を知らされていないのだろう。というよりも、勤労のための表側のオフィス空間を、意図的に裏で愚弄しているようにも思われる。
　こんな馬鹿げた仕掛けを作った丹下ファミリーは、外部の名士達や一部の幹部のみを招待して、特権意識を増大しているわけだろうか。
（それにしても、丹下建設の社員も社員だ。大人しく言われるままに働いてるばかりで、なぜ抗議しないんだろう。日本人て奴は、どうやらみんなマゾヒストなんだな。僕自身も含めて）
　かすかな義憤を感じると同時に、社員の知らない秘密を僕が握っていることに、僕は奇妙な優越感を味わってもいた。

　ようやく鏡の廊下を過ぎた。一定間隔でオレンジ色の灯の照らしている仄暗い通路を探って行くと、石の階段があった。
　ここがようやく出口のようだ。
　扉を開くと、ふっと涼しい風が頬を撫でた。
　明るい外光に包まれた。すでに時間の観念がおかしくなっていたが、どうやらまだ夜にはなっていないらしい。
　樹木の匂いの中で、僕は生き返るような晴れやかな思いがした。
　どこかで水の流れる音が響いていた。
　しかし、なんだかやたらに、湿気が強い。周囲は鮮やかな緑色をした竹の柵に変わった。音響が微妙に変化し、足音が壁にしんしんと反応する。
　内側から青白く籠ったような光で照らされた小さな竹薮が現れた。
　薮の中心部に人工照明が備えられているのだ。コンクリート壁には、竹の葉影が、薄い灰色の刃物を散らしたようなぎざぎざの形に映し出されていた。
　敷石の周囲には鉛色の玉砂利が敷詰められ、桐下駄が置いてあった。香しい木の香りがして、奥では白く淡い蒸気が湧き起こっている。そのため、ふっと風が吹いてくるたび、頬がかすかに冷たく濡れていく。水の流れる音が暗がりの方から響いている。
　箱根や伊豆あたりの落ち着いた温泉旅館の風情だ。
　好奇心は押さえがたく、僕は竹柵の背後を覗いた。
　ぼんやりとした湯煙の中の洗い場に、白いものが滲んでいた。女が裸で髪を梳いている姿らしい。
　一瞬、僕は、動けなくなった。白い腰やうなじが見える。
　――やはりここは、風呂なのだ。温かい湯気と、冷たい風が代わる代わる吹きつけてくる。木の臭いがぷんぷんと鼻をついたのは、向こうにあるのが檜風呂だかららしい。浴槽を囲む濡れた

木の枠が見える。
　なるほど、自分の会社の空中庭園に、こんなホテル並みの素敵な風呂があるのなら、喜作会長が朝風呂に浸かる習慣があるのも、もっともなことだ。まだ暗くはないが、樹木や竹の柵で囲まれているので、外部からは見えない作りになっている。
　その女は背中を向けているので、誰かは分からなかった。
　薄暗い照明のせいか、ひどく色白に見え、肉づきのいい腰のあたりが、優美な線を描いている。
　女の体の脇に木の桶が置いてあった。片膝だけ立てられた生々しい太腿や、むっちりとしたふくらはぎを伝って、水が薄くしたたり落ちていた。
　彼女は、何ともいえないような溜息を「ふうっ……」とついて、上を見あげた。そして頭を横に傾けて、両手で揉みしだくように、長い髪を洗い流し始めた。
(小夜子さんだ。あのヒトに違いない)
片膝を立て、体にお湯をかけながら、何やら独り言をつぶやいている。
「なんやの、あのジジイ。……もう、かなんなァ。ほんま、かなんわァ……」
　そして、しょげたような顔をして、タオルで肌をこすり落とすようにして、しばらくの間、首すじと片方の丸い肩だけ、丹念に洗っていた。
　不意に彼女の動きがとまり、裸のまま立ち上がった。
　僕は、どきりとした。
　しかし見つかったわけではないらしい。
　立ち上がった小夜子さんは、白い背中とむっちりしたお尻をこちらに向けたまま、少し背伸びをして、脇の笹の葉を毟り取った。両手に力を込めて、枝を何度もひねくりまわし、むりやり一本、折り取ってしまった。
　そして、浴槽まで近づいてから、すっと腰を屈め、灰色のタイルの上で腹這いになって、手を伸ばした。竹藪の隙間から見ていると、何だかきわどい恰好になっている。何をやらかすのだろうと見ていると、這いつくばった恰好のまま、白い湯気の立っている湯船の表面を、不器用にぴちゃぴちゃと何度も叩き始めた。
「嫌や、嫌や。もう。……クソ爺ィ。はよう、死んでまえ！」
　喜作会長のことだろうか。
　おっとりとした品の良い女性だとばかり思っていたのが、会長の前では本性を隠していただけなのだろうか。それから彼女は腹這い姿からもとに戻り、顔を両手で覆いながら笹藪の前で、しゃがみ込んだ幼女のように、しばらく泣いていた。
「ウチの……。娘時代を……かえせ」
　お湯の流れる孤独な音にまじって、なんだか蚊の啼くような、かすれた声が聞こえた。
　彼女の十代、京都の舞妓時代に、喜作会長との間に何があったのか知らないが、僕は内心、可哀想にもなってきた。酒に睡眠薬などを入れられて、得体の知れない白狐、などと思っていたのだが。
　人の気配に気づいたのか、ふとこちらを向いた。

と、同時に、悲鳴があがった。
「ひぇッ。誰どす！」
　そして前屈みにしゃがむようにして、怯えたように両手で胸を隠した。乳房の円いふくらみが脇から覗いている。
　気がつかれたらしい。僕は慌ててしゃがんだまま竹藪の中を戻って行った。途中から、立ち上がって、もと来た通路を扉のところまで戻って行った。
　僕であることが、バレてしまっただろうか。
　途中でさっき来た通路と違う廊下に出てしまったが、しかし、もう、ここで迷って立ち止まっている余裕はなかった。
（そうか。待てよ。……さっき見た夢を、もうひとつ思い出したぞ）
　何とも寝覚めの悪い不快な感じは、あの実験病棟めいた悪夢だけではなかった。
　それは丹下会長と小夜子さんとが、居眠りしている僕の目の前で、図々しくももつれ合っている光景であった。
　小夜子さんは目を細めて老人にしがみつき、和服が無理やり腰近くまで引きずり上げられていた。裸の脚につけられた白足袋が生々しかった。畳と擦れ合う和服のざらざらした音。
「お父さん、やめとくれやす。かんにんえ。ほんなことしたら。お客さん見てますよってに」
「なにをいまさら。そのおちょぼ口で、生意気いうな」
「こんなところで、そんなこと。ウチ、聡さんに叱られてしまいます」そのくせ声の調子は甘えているようなイントネーションなのであった。
「あの馬鹿はな、何も気づかん。そういうやつだ」
　僕は薄目を開けたまま、体がだるくて動けない。奇妙に意識がふわふわ、もわもわしていて、普通の酔いではなかった。
　白髪の狒々爺が、小夜子さんの顔に自分の顔をくっつけるようにしながら、片手を彼女の首にまわして、絡み合いながらゆっくりと崩れていく姿が見えた。

　廊下が明るくなって、急な石段が現れた。
『非常口』という赤いランプが灯っている。
　僕は扉を怖る怖る押してみた。仄暗い廊下の床に、光線がゆっくりと半月形に広がった。ぽっかりと、明るい落ち着いた水色の空が見えた。
秋の雑木林がそよいでいる。映画のように、輪郭鮮やかな空間が眼に沁みた。ようやく出口のわからない迷路空間から解放されたような安堵感を味わった。

　石段を降りると、そこは秋の林であった。
　まだ明るい。三時半、あるいは四時ぐらいだろうか。
　肌を刺激する大気の感触。櫟や楢の木が枝を揺らし、さらさらと乾いた音をさせている。時間と空間の感覚が分からず、陽で温められた石段に座り込み、僕は眼を両手で擦り、しばらく呆然としていた。

どうやら七階の南面に張り出した空中庭園らしい。このビルには何ヶ所かこういう緑の空間があるようだ。先程の風呂のある日本庭園は、よく手入れされた清潔な印象だったが、こちらの庭は荒涼とした人気ない原野のような作りだった。片側の一画が小さなススキの風景を作っていて、灰色の老婆の髪のように、さわさわと風に靡いていた。

「あんなとこに、風呂場があるから悪いんだ。顔を見られてしまっただろうか。この辺りの秘密の場所には社員も出入りしてないし。しかし、それだけに、まずいな。すぐに特定されてしまうかも知れない」
そんなことを思いながらも、さっきの白くて豊満な姿態が、しばらく残像のように残っていた。着痩せというのはああいうものだろうか。
梢の向こうには、淡い黄色っぽい光が射して、夕暮れ時の赤く染め上げられた鰯雲が重なり合っている。
僕は林の中へと入っていった。野道のような狭い小径は、枯葉で埋もれ敷石も覆われていた。樹の根元の湿った黒土からは、名も知らぬ狐色の茸がふさふさと生えている。灌木の下には、うっすらとした銀褐色のシメジも、吹きこぼれるように群生していた。
枝の隙間には、朱金色やピンクを帯びた明るい空間があった。
皇居の方だろうか、それとも臨海地区の方からだろうか。ここには幾つものビルを越えて、鴉たちが来るらしい。大きな鴉が枝の上で二、三羽、首を伸ばして嘴を突き出していた。
紫を帯びた光沢のある翼と、頑丈そうな黒檀色の嘴。首を傾げるたび、眼玉をガラス製のボタンのように光らせている。
細い枝がゆっくりと重みでたわむ。ときおり退屈したかのように、羽をそらして首を低く伸ばし、嘴を大きく上下に開いて「ガァア」と啼く。
繁茂した樹木に囲まれるようにして、緑色の沼があった。
田舎の古寺の裏にでもありそうな沼で、苔のような膜の張ったようなとろりとした水面は、多くの銹色の朽ち葉に覆われていた。
苔に蔽われた細長い木舟まで沈んでいた。この朽ちかけた小舟は、半分ほど水に浸かっているのだ。これは会長の故郷の風景を再現した光景らしい。荒廃はしているものの、絵画的な美しさも感じられるような沈鬱な風景だった。
林の奥の暗がりに、そこだけ異様な気配を発した鈍い鉛色の小さな箱があった。怒りを封じ込めたような凄まじく陰気な箱。強烈な我欲の磁場、鋼鉄の社。
――丹下神社だ。
その背景では、道化のようなカカシが、ニンジン色の毛糸の髪を海草のように乱して、斜めに傾いでいた。
このカカシ、背中には小型監視カメラを背負っている。
大きく突き出した釣竿の先端には、彼らの仲間の死骸を重たそうに垂らして、ゆらり、ゆらりと、虚無的に揺れていた。

(続く)